



さい帯血バンク NOW

第48号

2009年7月15日発行
日本さい帯血バンクネットワーク
発行者：中林正雄（会長）
〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社東館6階
TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417 <http://www.j-cord.gr.jp/>

10周年記念大会にご参加ください

日本さい帯血バンクネットワークは、今年8月に設立から丸10年という節目の時を迎えます。これを記念して、8月29日（土）と30日（日）の2日間にわたって式典やシンポジウムなどの「設立10周年記念大会」を行うことになり、現在準備を進めています。会場は早稲田大学国際会議場の井深大記念ホールです。大会期間中、国際会議場のロビーでは、ネットワークを構成す

る11のバンクや、さい帯血バンク関連の企業による展示が行われます。このうち29日の記念式典は、事前に申し込まれた方のみでの参加ですが、（参加申し込みは既に終了しています）そのほかの参加は自由（無料）です。さらに、参加者のみなさんには「10周年記念誌」を贈呈します。奮ってご参加ください。各催し物の内容とスケジュールは次の通りです。

さい帯血バンクネットワークが、どのように理解され、認識され、期待されているかなどをうかがうことを含め、厚生労働大臣にご来賓としてご出席の依頼をさせて頂いております。また、国際シンポジウムのパネリストとしてお招きしたさい帯血移植のパイオニアであるフランスのグルックマン博士から祝辞を頂くことになっています。そして、さい帯血バンクの功労者と長年の寄付者に感謝状の贈呈をさせて頂きます。さらに、記念講演として「さい帯血移植の歴史と概要」を分かりやすいお話として、また「さい帯血バンクネットワーク10年の歩み」と題して、事業報告を行います。この式典を行うことにより、一人でも多くの患者さんを救えること、一人でも多くの人に私たちの思いが伝わることを願っております。

8月29日（土）

13:30～16:00 さい帯血バンクシンポジウム
「もっとクロスしよう！ とる人、つくる人、つかう人」
17:00～18:30 記念式典

8月30日（日）

10:00～12:00 市民公開シンポジウム「さい帯血バンク10年目の課題」
13:00～16:00 国際シンポジウム

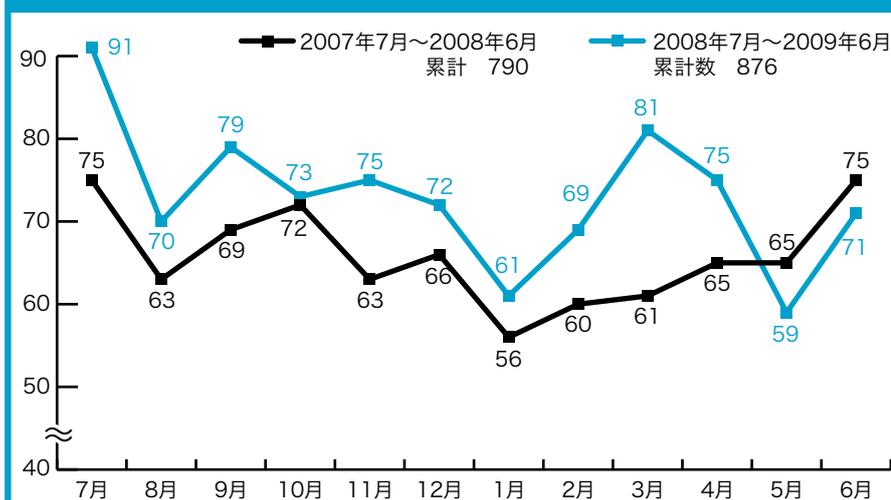
■記念式典

設立10周年記念事業の式典では、さ

さい帯血バンクの価値・大切さ・重要性をより多くの皆さまにお伝えし、日本

非血縁間さい帯血移植状況 (2009年6月30日現在の速報値)

移植数 (累計) **5486** 公開数 **31949**



■さい帯血バンクシンポジウム「もっとクロスしよう！ とる人、つくる人、つかう人」

さい帯血移植は採取施設（とる人）、バンク・調製保存施設（つくる人）、移植施設（つかう人）という三者の連係プレーにより成り立っています。より良いさい帯血移植のために各々が求められていることを見つめ直すとともに、事業を円滑にそして効率的に進めるため、他の二者に望みたいことを忌憚なく語り合う場があれば、ということでのこのシンポジウムを行うことになりました。パネリスト等は次の方々です。（敬称略）

●座長：正岡徹（大阪府立成人病センター）、正岡直樹（東京女子医大）



- 採取：植田充治（聖バルナバ病院）、保田仁介（松下記念病院）
- さい帯血バンク：松本加代子（京阪）、林茂次（東京）
- 移植：大野裕樹（北九州市立医療センター）、成田円（虎の門病院コーディネーター）
- その他、指定発言者として、河敬世（大阪府立母子保健総合医療センター）、平岡仁司（小阪産病院）、加藤剛二（名古屋第一赤十字病院）、高橋聡（東京大学医科学研究所）

■市民公開シンポジウム「さい帯血バンク10年目の課題」

日本のさい帯血バンク事業は、移植症例数も飛躍的に伸び、外見的にはきわめて順調に推移しているということができていでしょう。しかしながら、解決できていない課題をたくさん抱えています。慢性的な赤字経営、組織体のあり方、骨髄バンクとの連携、各バンクの様々な規格標準化などの要望にどう応えて行かなくてはならないのでしょうか。さらに患者さんを救命していく役割を果たすのに必要な課題は山積しています。パネリストと会場の参加者により熱く語り合います。パネリスト（敬称略）は次の方々を予定しています。ネットワークの将来構想検討会から神前昌敏（京阪）、日赤の立場から田所憲治（経営委員）、私的保存と再生医療に関して加藤俊一（東海大）、医療経済の立場から河原和夫（東京医科歯科大）、さい帯血の品質について高梨美乃子（日赤東京）、患者の立場から加藤徳男（ネットワーク患者

擁護委員会）、座長は野村正満（ネットワーク監事）です。

■国際シンポジウム“Global and New Insights into CBSCT”

「さい帯血移植への新たな世界的洞察」と題して、現在さい帯血移植の分野で世界的に最も注目されている以下の5人による講演を日本語の同時通訳で行います。（敬称略）

- ①ハル・Eブロックスマイヤー（米インディアナ医科大学）は、さい帯血の基礎的な研究から、さい帯血移植の臨床応用の基礎を築いた方。「さい帯血の生物学的特性とより有効な臨床応用」を語ります。
- ②エリアーヌ・グルックマン（仏パリ大学名誉教授）は、1988年にフランスから5歳のファンコニー貧血へのさい帯血移植成功例を報告した方。「さい帯血移植の発展——経験から学んだもの」を語ります。
- ③ジョン・ワーグナー（米ミネソタ大学）は、アメリカにおけるさい帯血移植の牽引者です。「さい帯血移植の現在の状況と将来」を語ります。
- ④高橋聡（東大医科研病院）は、成人における急性骨髄性白血病／骨髄異形成症候群に対するさい帯血移植で、非血縁骨髄移植や血縁者間移植に勝るとも劣らない世界で群を抜く成績を発表しました。「成人における骨髄破壊の前処置を用いたさい帯血移植——医科研の経験」を語ります。
- ⑤谷口修一（虎の門病院）は、さい帯血を用いたミニ移植を駆使して、80歳を超える高齢層や臓器機能が低

下した症例にまで移植適応を拡大して注目されています。「高齢者における骨髄非破壊的前処置を用いたさい帯血移植——虎の門の経験」を語ります。

■展示

2日間、井深大記念ホール前ロビーの壁面を利用して、さい帯血バンクとバンクの日常業務に関わる企業7社による展示が行われます。バンク展示は全11バンクの共同製作です。さい帯血ランキングや思い出に残る事例について、各バンク独自の機関誌、ポスター、処遇品等も展示の予定です。さい帯血ランキングでは、個性豊かなさい帯血情報満載です。処遇品等の展示数は限られているため、その場での配布はできませんが、ダメ元でそれぞれのバンクに個別交渉すればお気に入りのグッズがゲットできるかも……。ぜひお越し下さい。出展企業とバンク関連の主たる取扱い品目は以下の通りです。

- 株式会社アムコ（自動細胞分離装置セパックス）
- シスメックス株式会社（自動血球計数装置・試薬）
- 日本ベクトン・ディッキンソン株式会社（フローサイトメーター・試薬）
- 株式会社ベリタス（コロニーアッセイ用試薬）
- マイサイエンス株式会社（液体窒素タンク）
- 株式会社大同工業所（蓄冷材、インキュベータ）
- 旭テクノイオン株式会社（システム設計）



すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。





連載

私とさい帯血移植「医師として患者として」

第8回◎ 生着はしたけれど——移植のゴール

田結庄 彩知

移植という治療のゴールは、一体どこにあるのだろうか。最初の移植から5年がたち、2回の移植を経験した今でも、その答えは見つからない。移植で病気を克服し、命を繋いでも、様々な合併症で何年経っても苦しめられる人もたくさんいる。考えれば考えるほど、そもそも移植にゴールなんて、あるのかさえも分からなくなる。でも、あの頃の私は、頂いた新しい命が骨髄に根付き、生着することが移植の全てで、それがゴールだと思っていた。どんなに苦しくても辛くても、くじけそうになっても「生着さえすれば……生着するまでの辛抱」そう言い聞かせながら闘ってきた。だから、その目標に達して無菌室を出た時には、生を得た喜びと、闘いに勝ったという達成感と、亡霊のようにつきまとう死の恐怖から逃れたのだと安堵する気持ちで、ピンと張りつめていた心の琴線は切れてしまっていた。冷静になって考えると、生着までこぎつけても、増えてきた新しいリンパ球が患者の細胞を攻撃し、ひどい下痢や皮膚に発疹がでるGVHD（移植片対宿主病）や、それを抑えるために使う免疫抑制剤の影響で、白血球が増えたあとも感染症にかかりやすい状態は続いて、この二つが原因で命を落とすこともある。移植の大きな目標である生着は、ゴールなんかではなくて、まだまだ続く長い長い闘いの折り返し地点なのだ、と今になって思う。

無菌室から一般病棟へと移り、数日もすると、病院の地下にある売店にも行けるようになった。あれこれ迷いながらジュースを買い、玄関先にある椅子に腰掛けると、生ぬるい風の中で蝉の鳴き声が聞こえた。一か月ぶりに感じる外の空気は、何だか懐かしくて、目の前に広がる見慣れた光景も、通りを行き交う背広姿の人たちも、何もかもがキラキラしているように思えて、排気ガスの臭いさえ心地よく感じた。またこの世界に戻ってくるのができた、そう思うと

窓の外に見える東京タワーにも、手が届きそうな気がした。飲み込むようにして食べていた食事も、少しづつ味が分かるようになって、久しぶりに食べる母の作ったオムライスを中心に「おいしい」と思えた。病気に勝った、戦いに勝った、どこか異様な興奮状態で、このまま何もかもが順調に過ぎて退院できるような気がした。

しかし、無菌室を出てからわずか一週間後、突然39度の高熱が出る。熱の原因を探すためレントゲンを撮ることになり、機械の前で手すりを握ったが、撮影までの数秒すら立ってはいられず、床に座り込んだ。昨日までとは、明らかに違う、おかしい、何が自分に起こったのか。移植は上手くいったはずなのに、言いようもない不安が襲った。その検査で肺に見つかった小さな影は、わずか一日で急激に広がり、熱は40度を超えた。何が何だか分からないまま、呼吸が苦しくなりはじめ、酸素マスクが必要になった。翌日には息苦しさでトイレにも立てなくなって、かたくなに拒み続けた尿を採るためのカテーテルも受け容れるしかなかった。完全に寝たきりになり、水分すら受け付けなくなって首からは太い点滴が入り、胸には心電図のモニターが貼られ、指先には体の酸素の濃度を測る機械がついた。またたく間に管だらけになっていく自分が受けとめられず、訳がわからない。闘いはもう終わったのにどうして……頭をよぎるのはそれだけだった。

詳しい検査の結果、ニューモシスチス（カリニ）肺炎であることが分かる。免疫力の低下した人が罹る重症の感染症だった。主治医は「良く効く薬があるから助かる」と励ましてくれた。私も口

では「治療法があって、特効薬があるなら頑張りたい」と言ってはみるものの、これ以上何をどう頑張ればいいのか、全く思い浮かばなかった。それでも治療が始まれば、今より楽にはなるだろう。しかしその薬が入っても、胸をかきむしりたくなるような息苦しさは増すばかりで、もう望みなんでどこにもないような気がした。夜になり病室で一人きりになる。横になることもできず、起こしたベッドにもたれかかり、酸素マスクを握りしめるようにして呼吸をするが、吸っても吸っても息苦しくて、もう苦しくて苦しくてたまらない。どうすることもできなくて、どうしたらいいのかも分からなくて、心が決壊した。生き延びるために移植を受け、新しい命をやとつかんだと思ったのに、どうしてこんなことになってしまったのか。どうしてこんな状況でも生きていなければならないのか。移植で繋ぎとめてもらった今の命さえも恨めしく思えた。この世から消えてしまいたい、もう死んでしまいたい、今のこの瞬間に、一分でも一秒でも早く、楽になりたかった。ただ、一生懸命、治療をしてきている主治医への遠慮か、同じ病棟で命を落とした方への後ろめたさか、「殺してくれ、死にたい」という本音だけは、言えないと思った。どうすれば楽になれるか……意識がなくなってしまうといい、何も分からなくなってしまうといい、そうだ、薬で眠らせてもらい、人工呼吸器につないでもらおう、そうひらめいた瞬間に「人工呼吸器を付けて欲しい」と泣き叫んでいた。半狂乱になって病室で絶叫する私が、錯乱状態だと判断した主治医は私の腕をつかんで、精神安定剤を注射した。そのあとのことは、思い出せない。

筆者プロフィール

たいのしょうさち◎1977年神戸市生まれ。2002年、香川大学医学部卒業後、国家公務員共済組合虎の門病院内科にて研修。2004年、重症再生不良性貧血と診断。ATG療法施行も効果なく8月にさい帯血ミニ移植を受ける。2005年、虎の門病院を退職し東京医科大学大学院に進学。2007年6月、晩期生着不全で再入院。7月、2度目のさい帯血ミニ移植を受け、8月に退院し今に至る。



移植 病院 訪問

② 北海道大学病院

造血細胞治療センターと 口腔ケアチーム

北海道の札幌には3病院（9診療科）が移植医療機関として日本さい帯血バンクネットワークに登録しています。ご紹介する北海道大学病院は、小児科、第二内科、第三内科、血液内科が登録していますが、昨年の骨髄や末梢血を含めた造血細胞移植は、総数で54例を実施していますが、さい帯血移植は12例（うち1例は小児科）を行っています。4診療科のうち、小児科以外の3診療科は最近「造血細胞治療センター」として合同で移植チームを組んでいます。今回は北大病院の造血細胞治療センターを訪問しました。

●北海道という場所で

札幌駅にも近い北大病院で、病棟は最上階の12階にあって、札幌の郊外まで見通せるすばらしい眺望で、移植に不可欠な無菌室も4室あります。この4室を使い、ほぼフル稼働の状態で移植が行われています。北海道の基幹病院という性格から、患者さんは北海道全域から集まってきます。北海道は広いので、かなり離れた地域から丸1日をかけて通院しなければならない方もたくさんいるようで「移植後のケアだけでも地域の病院でできるようにならないか」が課題だそうで、血液内科



これから口腔ケアの回診へ

の重松昭夫氏は「フォローを頼める病院が遠いところの患者さんは、入院が長引く傾向がある」とも語っています。また、さい帯血移植の患者さんは、高齢や非寛解期、再移植といったハイリスクの患者さんが多いそうです。

●さい帯血移植と口内炎

造血細胞治療センターの特徴としては、歯科診療センターとの協力による口腔ケアチームがあります。移植には前処置の抗ガン剤投与や移植後合併症で口内炎など粘膜障害が高く出る傾向があります。また、細菌感染症を防ぐことにより、在院日数の減少や高熱を抑えて口内の痛みで食べられないといった症状を緩和して、確実にQOLの改善に役立っているそうです。週1回行っている口腔ケア回診には、歯科医、薬剤師、栄養士、看護師も同行します。回診だけではなく、必要に応じていつでも対応しています。移植前から歯科の外来に行き、感染源となるものを事前に除去する口腔管理が始まります。口腔ケアチームは、移植患者さんだけではなく、化学療法の患者さんにも対応しているそうです。

●口腔ケアの専門家たち

口腔ケアチームで口腔外科の柏崎晴彦氏は「歯科医は虫歯を削ることが仕事だと思われていますが、最近では口腔の細菌が全身に関わってきていることが知られていますから、移植患者さんにもお役に立てる」と語っています。また、薬剤師の笠師久美子氏は「症状によって、飲む、貼る、塗るなどの剤型選択も重要だ」といいます。また、



重松氏は「うちでは急性リンパ性白血病の移植に前処置でエトポシドという抗ガン剤を使って良い成績を上げていますが、この薬は副作用が強くて口内炎が強くなる傾向があるから、口腔ケアチームは高い効果を上げている」と感想を漏らしていました。

■善意のお気持ちに感謝します■

九州造血幹細胞移植看護ネットワーク様		100,000円
東京都	藤野 年子様	100,000円
茨城県	菊池 久様	50,000円
神奈川県	河西 澄江様	10,000円
埼玉県	大寺 信行様	6,000円
岩手県	遠藤 律枝様	2,000円
京都府	福原 琢哉様	1,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク